

バルカッチャの船乗り

——仏典とエリユトラ海案内記の接点——

定 方 晟

経典の背後に歴史を読みとる——それは仏教の歴史を解明するために重要な、また困難な仕事である。以下は「スッパーラカ・ジャータカ」(Jat. 463)の背後にそれを成立せしめた社会情勢をさぐるという試みである。

まず、このジャータカの梗概を紹介しよう。「序分」弟子たちが仏の広大な智慧を讃嘆しあつているところに仏がきて、「自分は前生でも目くらでありながら、海のしるしによつて海の中にしかじかの宝が隠されているのを知つた」と述べる。「主分」バル王 Bharu がバル国を治めていたとき、菩薩はバルカッチャ Bharukaccha という港村 patanagāma の一船長 niyyāmañeṭṭha の家に生れ、スッパーラカ童子 Suppārakakumāra と名づけられた。父のあとを襲つて船長になつたが、のちに海水で視力を失い、船乗りをやめて、王の財産鑑定家になつた。彼は王のもとに持ちこまれる象、馬、車、敷物の欠陥を触覚によつて発見した。しかし、王がいつも八

カハーバナの報酬しかくれないのに不満を感じて、彼はバルカッチャの浜 Bharukacchapattana に戻つた。彼は彼の才能を見こんだ商人たち vaṇṇiā に頼まれて、彼らの船の船長になつた。七日後に船は嵐にあい、クラマーラ海 Kharuṇṇāla に漂つていつた。そこには人間のからだをし、剃刀のような鼻づらをした魚が泳いでいた。商人たちがこれを報告すると彼は「バルカッチャの商人たちよ、この海はクラマーリと呼ばれる」と告げた。この海にはダイヤモンドがあつた。ほんの一網だけ採集したが、それは商人たちが欲ばつて採集しすぎ、船を沈めることを恐れたからであつた。以下、火のような輝きのあるアツギマーラ海 Aggimāla (火鬘)——金がある——、ミルクのように輝くダディマーラ海 Dadhimāla (酪鬘)——銀がある——、クサ草の広がつたような感じのニーラヴァンナクサマーラ海 Nīlavāṇṇakusamāla (青色草鬘)——青摩尼 nīlamanī がある——、竹林 veḷuvana の広がつたよう

な感じのナラマール海 *Nalamala*——竹色のルリ *vanisarg-avejuiya* がある——に次々に漂いつづけ、それぞれ宝を少量ずつ採集した。最後にはヴァラバームカ海 *Valabhamukha* に漂つていつた。ここには恐しい渦がまいていた。菩薩は商人たちに問われて、その名を告げ、その渦に落ちこんだら絶対に助からないことを告げた。七百人の乗員は恐怖して泣き叫んだ。菩薩は香水で身を浄め、新衣を着し、一杯に満した鉢をもち、へさきに立つて願立て *saccakiriya* をおこなつた。

「私は一度として殺生をしたことがない。この真実語 *sacca-vajja* をもつて船が安全に帰れるように。」すると、それまで四ヶ月も遠く漂流していた船が一日でバルカッチャに戻つた。しかも船は八ウサバ（三、四百メートル）も陸を進み、菩薩の家の前についた。彼は商人たちに金、銀、宝石 *manu*、珊瑚 *pavāṇa*、ダイヤモンド *vajra* を分配し、「おまえたちには宝はこれで十分、もう航海するな」といい、教訓を与えた。「結分」仏の弟子たちはそのときの商人たちであり、仏、すなわち彼自身はスッパラーカであつた。

スッパラーカ・ジャータカに似た内容のものとしてジャータカマラー第十四のスパラガ物語がある。両者のあいだの異同を示そう。導入部はジャータカの序分と違つて「法を守ることの功德の大なること」が宣言され、その例として主分が述べられる。主分では菩薩は賢明な舵手 *nausātrahi* と

して生れ、*Supāra* と名づけられる。彼の住む町はジャータカのようにバルカッチャでなく、*Supāra* である。また、王の財産鑑定家になる下りがなく、ただちにバルカッチャ出身の商人たちの訪問をうけることになる。海上で嵐にあい、次々と漂着する海はジャータカの場合と同じであるが、アグニマールとダディマールの順がここでは逆になつてゐる。ヴァダヴァームカ *Vadavānukha* の大渦にまきこまれそうになつたとき菩薩が不殺生戒を守つたことを持ちだして助かる点はジャータカと同じである。海中の寶石が帰途に採集される法の遵守の大切さの再確認になつてゐる。

さて、この物語のつくられた社会的背景を考察してみよう。「バルカッチャ」はかの有名な実在の港町バルカッチャ、今日のブローチに相違ない。「カッチャ」は湿地を意味するが、ブローチの西北方にある湿地帯も今日カッチと呼ばれてゐる。主人公スッパラーカはジャータカマラーではスパラガとなつてゐる。*Supāra* は「横断しやすい」*easy to be crossed* の意であるが、ジャータカマラーによると主人公は航海が巧みなのでスパラガと名づけられたといふことである。しかし、ジャータカマラーではスパラガは港町の名でもある。「横断しやすい」はむしろ港町の名と相応してゐるかもしれない。ところで、このスッパラーカ (*Skt. Sur-*

paraka) もかつて實在した港町の名であり、阿育王の摩崖法勅が発見されたことによつて阿育王時代のこの町の重要性が窺われる。地名としてはスッパラーの形もあるが、その場合、スッパラーカは「スッパラー出身者」の意味とならう。

さて、バルカッチャとスッパラーはインドの港町として西紀一、二世紀頃のギリシヤ・ローマの学者や船乗り知られた名である。西紀元年をはさんで活躍したストラボンには Barygōe がてつおり (Geog. XV C. 720)、西紀二世紀中頃の プトレイオスには Barygaza (Geog. hyphegesis VII 1. 62; VIII 26. 12) と Supara (VII 1. 6) が、エリヤトラ海案内記 (以下「案内記」と略称する) には Barygaza (XLI) と Suppara (LII) がでている。案内記ではバリユガザ港の説明の次にスッパラー港の説明があり、後者は前者の南に位置せしめられている。案内記にはバリユガザ港のインド人パイロットのことがでている。バリユガザの湾は狭く、海流や暗礁や浅瀬の危険がある (XLII) ので、彼らの案内が必要なのである。案内記にこう書いてある。「かやうなわけで「湾の」入口で王に仕へる土人の漁夫たちがトゥラッパガとコテュムバと呼ばれる長い船に人を乗し組ませてスュラストウレーネー迄出迎へにやつて来て、我々の船は彼等によりバリユガザ迄案内される。と言ふのは彼等はすぐに湾の口から船員の乗つたまま浅瀬を通じて船を操り、そして我々の船を定まつた船着場を経て曳

船して行くから。」(XLIV) (村川堅太郎訳、以下同じ)

さらに案内記には遠くアフリカ沿岸まで進出したインド人のことがでている。ディオスクリーデース、すなわち今日のソコトラ島についてこう書かれている。「島の少数の住民は陸地に面する島の北側の一方のみ住んで居り、彼等は外来者で商業の為に航海して来たアラビヤ人や印度人や、更にヘルレーネスの混合である。」(XXX) しかも、註によると、今日の Socotra の名は梵語の Dvīpa Sukhādhāra 即ち「幸福の島」からの転訛である。ついにながら、聖トマス行伝においては、インドから商人アバナスがエルサレムに赴き、トマスを伴つて船でアンドラポリスに戻つたことが記されている⁽¹⁾。ジャータカに出てくる商人たちもこのようなインド人の仲間であつたのだらう。

船で海上に乗りだす人の話はスッパラーカジャータカ以外にもある。たとえば賢愚經第四十の大施拵海話⁽²⁾がそれである。これもジャータカの形式をとつていて、主人公はパイロットとしての優れた技能を發揮する。この中に「われ薩薄となつて」という言葉がある。薩薄という語は四一九年頃中国に帰つた法顕の記録の中にも出る。商人の長という意味らしいが、西紀前後の刻文に現われる「商主」⁽³⁾ saṭṭavāha のくずれた形 *saṭṭ-vāh を音訳したものと考えられる。刻文にはまた pṛg-anna なる語が現われるが、これが薩薄に率られる貿易商の団

体のことかもしれない。大施抒海話には「風を望んで帆をあぐ」という語があり、彼らの船がエリユトラ海を渡るのと同じ帆船であること、かつ恐らく季節風を利用したであろうことがうかがわれる。

西紀二、三世紀頃からインド人が東南アジアに進出しはじめた様子も知られている。呉の時代に活躍した康僧会は父の代にすでにインドシナまでやつてきていた。父は商人であつた。しかも康という字から判断すれば出身はサマルカンドといふことになる。時代は下るが(四一七年頃)、法顕はガンジス河口、セイロン、ジャワでそれぞれ一年と待たずに商人の船をつかまえて便乗している。なかならずジャワからの船は中国行きであり、しかも乗船者たるバラモン教徒の商人たちはすでに中国航路の知識をもつていた。法顕はセイロンで中国産の絹の扇を目撃していたから、インドと中国のあいだの海上貿易も行なわれていたことがわかる。かの張騫がバクトリアでみた(インド經由の)四川の竹杖や蜀の布もこのような海上ルートを運ばれたものとすれば、南シナ海の貿易もエリユトラ海貿易と同じ古さをもつといふことが言えよう。

ところで、案内記にはバリユガザ附近の国勢や人種のこと述べられている。XIIに「バラケースの後にはちにバリユガザの湾とアリーアケー地方の海岸となるが、後者はマンバノスの王国と全印度との始まりである」「体軀頗る偉大で

色の黒い人々が居る」「首都はミンナガラで、云々」などとあつた。アリーアケー地方というのはアリーヤ人の地の意味で、バリユガザの湾を含む地域をさすらしいが、「色の黒い人々」というのはアジャンターの壁画にもみられるアンドラ系の人々を想起させる。ミンナガラというのはバリユガザより上流のナルバダー沿岸にあつたものらしいが、その位置はつきりしない。XVIIIによると、この地方の東のほうに「オゼーネー」即ちウツジャイナがあり、そこには、以前王宮もあつたといふ。なお、ミンとはスキチア語であるといふ。

XVIIIとXVIIIによると、パンジャブ地方からのルートもこのバリユガザに通じていたかのである。即ち、バリユガザの背後にいる様々の内地の種族としてアラトゥリオイ(?)、アラコシア人、ガンダーラ人、プシユカラヴァティイ人、バクトリア人があげられ、地名としてカスバビユラ、パロバニス、カブール、スキユティイ¹等があげられている。「と」によると、バリユガザの南にダキナパデース(デカン)があり、ガンゲース(ガンジス)に至るまでの龐大な人口を含み、ダキナパデースにはバリユガザから廿日行程南のバイタナ(バイタン)と、これから十日行程東のタガラ(今日のテール?)という二大商業市がある。

XXXVIIIによると、インドス河口にはバルバリコンという港があるが、それはスキユティアの地に属し、背後の内地に

その首都ミナガラがあり、バルティア人の王により支配されている。

これらの記事で驚くのは、パンジャブ地方がインダス河口ではなく、バリユガザ港に通じているということである。アフガニスタンのベグラムのクシャーナ朝の都城跡から出たローマの製品もこのルートをとつてそこへ運ばれた可能性が強い。この場合、クシャーナ朝のもう一つの都マトウラーが重要な中継地となつたであらう。まさにアリーアケー地方の海岸（即ちバリユガザの近く）は「全印度の始まり」(XVI)なのである。

さて、ウツジャイナはマウリヤ朝時代には西北のタクシラと共に副首都の役目を負つていた。ウツジャイナは首都パトリプトラからバリユガザに通じるルートの上にあり、マウリヤ朝がいかに西方世界に関心を示していたかがわかる。次のシュンガ朝もこのルート上のヴィディシャを副首都のごとくに扱つた。マウリヤ朝からシュンガ朝にかけパールフットやサンチーに塔がつくられ、彫刻が施され、やがて、ポンベいの東南方面のバージャー（前二世紀）やカールリー（前一世紀）等に仏教窟院が造られるが、これは仏教が前記の道をたどつて発展し、バルカッチャをへてアンドラの入口に広まつたことを示す。パールフットやサンチーにはジャータカ中の場面がいくつも彫刻されているが、われわれのスッパラーカ・

ジャータカもこのようなルートの上を往来した人か、それに近い人によつてつくられたものであらう。ただ仏典にでてる話では財宝は貿易によつて入手するのではなく、海中から採取するとなつてゐる点が非現実的で、やはり宗教者が編纂した話という印象は免れない。

最後に、案内記によつて、バルカッチャ近傍をめぐるインドの政治情勢をみてみよう。案内記にはインドの王の名として三つの個有名詞が出る。(一)アリーアケー地方がマンパノスの王国と全印度との始まりとされる、そのマンパノス Mam-banos (XII)、(二)カルリエナ市（スーバラの近く。カンヘリとジュンナルの刻文によつてこの町の商人や金工が数多く知られてゐる）が法律指定の商業地となつたときの王老サラガノス Saraganos (LII)、(三)この港町を奪つたサンダネース Sandanes (LII)である。三名のうち、サラガノスがアンドラ朝の王名に出てくるサータカニであることは間違ひなからう。マンパノスがナハバーナ Nāhapāna であることにも諸学者の意見がほぼ一致している。サンダネースに関しては異論が多いが、レヴィイのカニシカの栴檀 Candana 説が有力と思われる。

三王についての案内記の書きかたをみると、マンパノスのみは案内記作者の同時代人で、他の二王はむしろ過去の人物とうけとれる。三王の関係は老サラガノスが港を設定し、サンダネースがこれを奪い、現在マンパノスがそれを支配して

いるという関係である。

これをインド側の資料（刻文、貨幣銘、伝説）から得られた事実と比較すると、まずカニシカ王がサータヴァーハナの王と争い、優勢であつたという伝説がある。次にナハバーナはクシヤハラータ家に属する王で、バルカッチャを含む地域を支配していたが、一方ではカニシカの属したクシヤーナ朝に服属していたようである。しかも、ナハバーナもアンドラの王と争つたことが知られている。カニシカの年代には異説が多いが、ローゼンフィールドのように西紀二〇〇—二一五年、ナハバーナが西紀二二〇—二二五年としてみよう。一方、老サラガノスという呼称はナハバーナと同時代のガウタミー・シュリー・サータカルニと区別するための呼称と解釈しよう。この王家には代々サータカニの名をもつ王が出ているが、その中のたとえば前二世紀のサータカルニ王が老サラガノスではないかとも考えられている。従つてこう考えられる。バルカッチャ附近は古く老サラガノスによつてアンドラ朝の指定港になつた。西紀二世紀のはじめカニシカがこれをアンドラ朝から奪つた。カニシカなきあと、カニシカの総主権下にあつたナハバーナがこの地の主となつた。このときアンドラ朝にガウタミープトラがいたが、いまだナハバーナと事を構えるには至つていなかった。案内記はこの時点で書かれたものである、と。

この考えによれば、案内記の成立年代は西紀二二〇年頃とすることになり（ナハバーナがガウタミーに敗北するのは西紀一三〇年頃）、村川堅太郎氏その他の西洋の学者の西紀一世紀説と矛盾する。しかし、この矛盾を解釈する方法はある。即ち、案内記が最初に書かれたのは一世紀として、その後生じた政治情勢の変化によつて、マンバノスとサンダネースの下りが書き加えられたのであろう、と。

われわれのジャータカがいつつくられたかはわからない。しかし、バルカッチャを中心に海上貿易が栄えた時代の産物であることはいえるであらう。

註

- (1) 聖書外典偽典 第七卷 教文館 二二九—二三二頁。
- (2) 同類のテーマ（海中に落した宝珠を拾うため水をかいだす菩薩の努力に兜をぬぐ竜の語）は仏本行集経（大正二、七九七頁）、生経（同、七五—七六頁）、六度集経（同、四—五頁）にも見られる。賢愚経では主人公は婆楼施舍国に生れる。
- (3) 静谷正雄「インド仏教碑銘目録」索引を参照せよ。なお薩薄に對しては種々の原語があげられている。sarva（足立「法顯伝」）、sabhya（国訳一切経「法顯伝」）、satha（上田天瑞訳「十誦律」）、sāthavāha（赤沼・西尾共訳「賢愚経」）、sabhā（中村元「仏教語辞典」）。cf. MVP 7362. cf. sava.
- (4) Lévi, Kamīṣka et Śatavāhana, JA 1936, p. 73.
- (5) ibid., p. 84, 87 etc.
- (6) J. M. Rosenfield: The Dynastic Arts of the Kushans, p. 29.